見拾遺

玉ゝつら　并古

哥を名とせり

[V, 297

PL788
.4
.G4
1654
vol.29
copy 1
Asian
Japan
Case

LIBRARY OF CONGRESS

2004 55 1302

34

注 源氏卅六才の十二月より卅七才の二月まで 一 源ノむらさきと柏木也

く柏木いとゞめいよく。いでうせんこと

ち柏木おもひなやみ。ぢ女三の宮にこそ

うこそいと柏木くれ。三の人のれなしと申

ごとまうひそ。うぐしうべきれえあれ。みれ

ひおどゞ。おまゞごとまつけても。さはく

そうしもくまあるさ御のことゞ紙。柏木患ずず

あゞ抱しなふれころざ御おそせむびぐ御あまく。

けぐやあるれもそあしあゞれおもんまつけてゞ。

女二ごまいうやあゞ柏木しへさふ。地ぞれ志りぞ

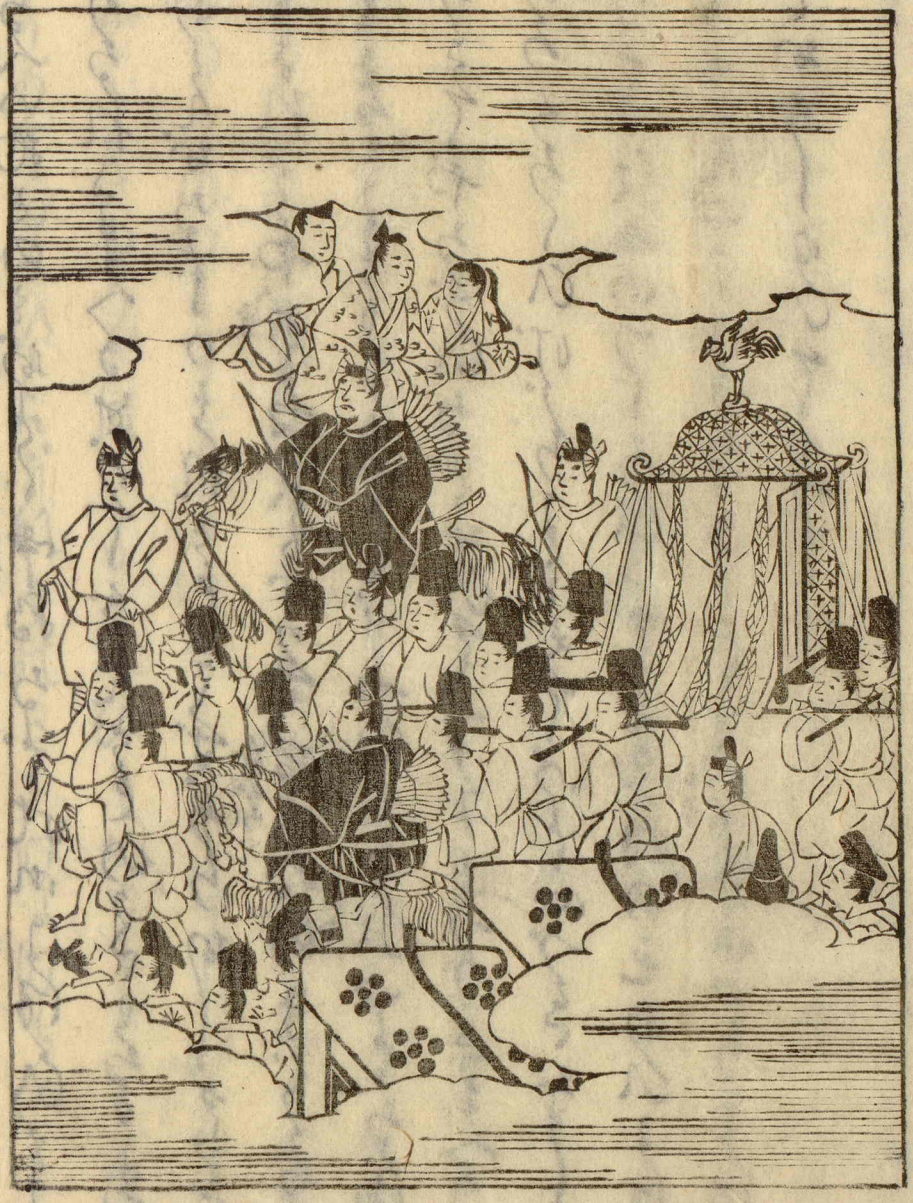
る。おほきおほいとのの太政大臣の行幸ぞそ。世は御へあくさきぐを。

ほ六条院よりもれゝくひさ生けくをふ。冷泉院うち

時る出ぬひて、朱雀より五条の大路をよしぎ海に
おれぬふ。かけらげのもとまで、抱見車隙なし。
行幸といへど、なるしずかうしもあらぬを、かふいここ
ちち、上達ゆもこれ心ことなれ馬鞍をとくの人、隠身
馬ぞひのこちたけぐち、さうぞくをかざり給ひ、
めづらかなおし。左右大臣、内大臣、納言よりしも
とく、ましてのこらずつうまつりぬへり。何を色の
上のさぬ。えびぞめれしたがさね。夜上人五位六位
まで美たり。雪たびいさくかげうちつまて、道の色
さへえんなるに、みこ達上達ゆまじ。たかりかく
づしひぬへるいめづらしき物のれよそひどもを

まうけぬふ。徒(そ)清の鷲(たか)絹(かひ)どもも。まして世なり
めなれぬまり衣をこぶれさつ。乱色ことなりめづら
しうおしさしくるさをひ出けく。それ人とも
なく。かすかなるあしよけさ車などゝ輪(日)をとし
ひじかれ。おもれげなるもありうさもしのまとなど
まもこのましうさちさ国よふ。よきくる国おほかる。
ましのるいのひめ(むしろより抽見給ふんをいふり)も立出ぬへりそこぞくいどこ
つくしぬへる人のれうちち省徒をこなふまくなり。
(冷)みくどのおり夜のれぞなりて。うるもしうくかがつさ
なされうるりしめる。なずしひ望ゆべき人なし。けが
ちくおとくをひとしれずめをつけなりうまへれど。

さらくしうゆこさまげ。さりまはもれしゆへ
れど。恨ありし。いと人まもぐれたる（以ノ事）ゆく人と
えて。（冷ノ）れこしのうちよりほかに。見うけるべくも
あらず。ましてかたちありや。おしやなどもうさ
ごぶちのさしかへり心うつも。中か将なるくれ乃
あぶべやうの人はなまくもあらずこそいたれは。
（以）さしまさぐひなうおりしますなりけり。源氏乃
おとゞの御かかざ面もいともれとも（冷ノ源ニまさうをれ冷ハまさうてうつくしきとこ）こえ給ものを。
思なしのいますこしいけくしうかたじけなく
めでたきなりさはかうさぐひもおりしがたうな
なりおてなかひとはこれもれこさまげまけちひこと



まこの目おとゞ（ほ）よしのこゝ（む）いま。唯日（ほノ文詞）うへ（冷）いこなしせ
ぬひてきや。かれことはおぼしなびきぬらんやと思ひ
ぬへりしろさしきしまいとうちとけたるふ
こまやかにさばこてもあしぬがおしさ紙
こぬひておひ（むん）なれことやとひひ給ひ。らくも
としもしを給ものれとおぼしれかへりは唯日も
うち（む）さしあさぐもをしこゆきまいさや
なまそらの光やいこしおぼつちきあくしとゞもなり
なんとあるを。（紫）うへもこゝまふ。（添詞 さくのみの書表紙にあり）しかくのこと紙
そゞのしきゞ。中（秋好）ぞくておもすれど。こて
なぶらのおぼしまはびんなるべしかれおとゞま

ヤテ

ちられても女れ(こきぢん)うて又さかしひぬんだなど。
ちひこぶろめりしすぢなり。ゆゑ人のさもなき
つうまつらんに。ぱぐうちひなりしんも。う人(冷)を
ほのこなりて。えかけもなれておもふはあしじと
のうまんは。おれ(笠詞)うえて。めで(冷を)えしとこなりとも。こころ
もて宮げ人ちひこんこそ。いとさしなこなこて
ろなしめとて。ゆしひ給。いで(源詞)そこにしもぞめでこさ
こし給もんなどのうまひて。まこれ人し
おほ(ほ)さすひりは更にくもしぬをなどて
ミゆきにめをこさしけん。なを(詞)おぼしそなど。
こしぎすしめのふ。とてもかうでも。先れ(まづ)もぎのこと

こそちとおぼしてそのれまうけのれでうどれ
こ面かなるさからどもくちへさをのふおるくれれ
かしき紙れころまはいともおもはさぬことをぶる
をのづからぶけくいかしくなるを、ましてう
ちのおとゞまも、やがてこれつゐでまや、しらせ
えてまつりてましとおぼしれが、いとめでたう
所をさまでなん、さしかへりて二月まとおぼして、
名ハさてさく、おぼくしのべきほどなるぬを、
人のれむすめとて、こもりおかするほどハかなるぞ
しも、民神のれけとめなど、おしらハなるぬ程なれば
こそ、年月をまぎれすぐしのへ、しもしおぼし

中(タ)物の志もよろひろ三条(大宮)まそひさふらひぬひて、
うろのそらなくまれしぬて、おりあしきを、いる(源ム)
きましとおぼす、世もいとさるめなく、こや(大宮)もうせ
さを給ひ、ぬ(玉ノ)ぶくあるべき紙、志しぶがかまて拘し
し面りん、つゝふるきことおぼうらん、おまする(大宮ノ)世なり、
このことあらりしてんとおぼしらりて、三条の宮(大宮)
はとふらひぞらけらり給、今(地)いまして世びやうる
ふるまひぬべど、こゆきまおらしぶよそほしく、
いよく先をのこそへ給はれうちなどれ、此世なり
こしぬ心りして、めづらしうこ(大宮)なり給ふは、いと
はこうらのるやましさをとり捨らるくゆらして、

かうおのくりれけうそくまうりてぶうげあれど、
抱あぢいひとよく男し給、うしうハおりしまゐらぐつき
けつとおもまずしの紫のうへまどりして、おどろ
おどろきうるげさ男しさすめれバけやまるまれ
さきら給はうしあん、おぼつうぢり男しさせ川家、国
あぢらはもらしあるつひでちきさ限いまうず、おはやけ
ごよつみつ人とともて、こまり給れバ、みろげうね
うねきうぢらぶ、けしあるりまで給うぐよそひちまど
うれよりまゐろ人ぶしらへぬまでぶまりありく
さめし、世ぢも今も給めれど、おやしくおれくまつさ
本性また、そふゆれうそはあん給ふべきあるど、ふぞうし給。

大文字詞
年のつもりのなやこと云ふこまへ川に月ごろは
なりぬるをことしとなりてもこれこすくなさ
やうなれば侍れば今一こびごまうくこなり罪し
さすることもなくてやとこころぼそく思ふこまへ
つるをかふこそ又すそしのびぬるこころし侍れ
いまはなしこともむべきほどにも侍しぞ さべき
ひとぐにも立をくれ世のすゑにありとまれる
こゞひと人のうへにて いとこころづきなしとこ
侍しかば 出こちいそぎをなん なりひもよほされ
侍るにこの中夕ねのいとあれにおやしきまで
ちひあつひこころをさちがいなふをこ侍るにな

さ海ぐまかけとぐめしれて、いまくでなかびき侍
と、あぐなきまなきて、此地こ急のまなくらもおこ
がましそれど、さることどもなれど、いとあそれ也、
此深もれがたりどもむうしいまのさまあつめきて
給ひいでまうち詞のおとゞは、同へぐそどまいまも
給ことしげかんをかうついでま對面のあしだ、
いかまうれしかん、いでさてしましきんとしことの
侍るをさらべきついでなくてはくいめんもまさがる
それがおぼつかなくてなんときこし給、大笑詞おぼやけと
のしげきまや、ひとくしのうろざしれかくら
めまや、さしもとゝひ抱し侍しどの給ひ

べきことは、なるゞ面のことなりは、中夕の方
めしげるしられ（雲ぬ人）ことも侍るをたゞめれことは
しらるゝ。今はけるくもてなすなりつけて、立
そめましみのどりへさらくおれまもあらず、おこ
がましきやうにかゝりても世人もいひもらす
なるをなどもれし侍れど、（以）そこゝろさろむし
ありいとさけがたき人のほんぞうにて、心えずなん
こまゝるとこの（地）中夕の御ことにおぼしての給
へば、（泳）うちわらひなて、（詞）いかゞひなさまゆるして、
まて給こともやとこさく侍りて、こゝろさんなん
（玄ぬ人）ふめやうありしかど、（以）いとさびしくいさん

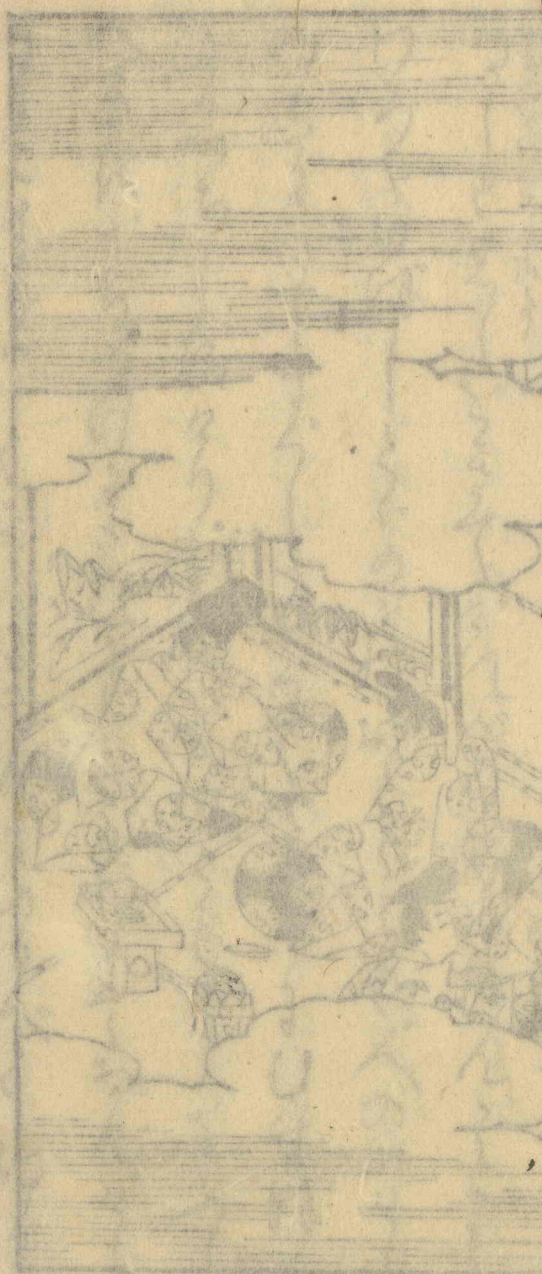
十十

給らしをこ侍し後、なるまでことをもまぎ給
けんと、人ひろうらひもふかまへてなん、よろづの
ことまつけて、きよめといふと侍れば、いかゞいさも、
さりかへし、すいの給をざらんとは、むかまへなから
うしろちかしき、まごゝ（渇恵世之）のすゑ、りまちうる、
かくすむべきあらこそいできがるかべい世なれ、なる
ことまつけてもすゑまなれば、おちゆくけぢ絶
こそやすく侍めれ、いとかしくきくぬふるなど、
ぬて（そしよりむぞれるを源ノさう給之）さるいかれ、しりぬべき人なるん、むひまがふ事
こと侍て、ふいまごゝさりて侍るを、そのあるをも、
さるひがまざともあし侍らずありしかば、あれ

がちまことのうろをこぶ四人さふことも侍らで。
こゞさうもれしくさのすくなさ紙。かゞとまてを。
（源ノ氏子すくなきを云ヘ）
なまうはさせひ四人ゆるして。おさくむ川びもミ
侍らずして。とし月侍りるを。いそぐかさうし
（冷ノ）
めしかん。うちまお目さらしやうなんあり。内侍志
かみこやづ人すう人なくて。かれ所のまつりご
としどけなく。女官（ゐん）などもお目やけどをつうま
つるに。ころぎなくことゑざるしやうまなんあり
けるを。こゞいまうへ（冷）まさふしふこらう（古老）のすけ二人。
又さるべき人ぐ。さ風（文づへをのまむとのうまへ）くまゆさするを。はるぐし
うえしらはを給りん。こぶ四まゑぐふひとなん

のまゝ、さやうにつゝえ、もれきさせ、のへと罪し給。宮（大宮司）
いかなく侍けることなかしこれにも、さ面ぐに
かゝるなりすゝ人をいさふことなくひろひあけ
めしなくにいかゝる心にてかくひきこゞへ、かうちき
そしらるゝん。このさしごろうけ給ちりてゐりぬる
しやと罪しの人が、さうやう侍ことなり、くもしき
さ面ハ、かれおとゞもをのづからこゞ罪のひてん
ゝざくしきなを人のなりしひにてこゝろことに
侍れば、あるさんにつけてもらうがはしう人いひ
つゝへ侍しんを、中（タ）将の朝臣にぐるまぐつきまへ
しらを侍しず、人にもしさを給まじと、れくち

そぐろうに物し給ふ。ふとさきもあひて、いとさう
とくにおもちあやまひなど、大臣といはんに
ことひ申へり。忍び深のれさしぬき、さくらのし
さがされ、いとながうしりひきて、ゆかくとこと
さらびこうれもてなし。あれきらくしとこえ
なへるに、六条殿も、さくらのかしのさのれなをし。
いまやういろのれぞひきかされて、しどけなさ
ぬほきこすがて、いよくことへんもれなし。光こそ
まさりぬへかうしたくかに、ひさつくろひこまへ分
れありさ後に、なずしひてもこし給ハざるをなと、兵部
つぎくに、いとまれこそよげなりれなりしひまて、
つどひ申へり。藤大納言、其家大先など今ハさこしぬる。



女(士夫ん)もるまいて姫(菱)君のれこと紙見し出りまおりし
ままさられ肖様いきほひをこまり給ふおりぎりなし
くとぐめぐらく志ほくとなきぬふ(地)おまごろもは
げまうろことなりやりかうつのでなれど中(タ)将の
れことをばうち出給いぎなりぬひとふしようい
(雲ねを引くあし給ふす)
ありしと見しをきてぞれば、くちいれんことも人
ひろくおぼしとぐめかれ(以)おとぐちる人のれはしき
なきるさしすぐしがるくて、さすがにむすばれ
ろ心ちし給ひり今(討)夜もれともりさふしふ
べき紙うちつけにさはがしくもやとてなん、はふ乃
しこまりはことさしるなんまいるべく給ひと

まるくて、例のつぶどもまゝかしのくさき地こゝろ
ことまりありかくなりまへり。[帝衣]れうさぐ。これこ
ろごろまさうぞく人ごのれうま。らしあふぎ
まで。とりぐまもいでまへる有信。をとりまさしず。
さ面ぐまつけて。さぢりのれこゝろだせどもま。
いどこけらしまへれば。かりしうこゆりを。[二条ノ]東の院の
[中将などこ]人ごもかうれいそぞはさて語かれども。とふらひ
[illegible]べきかずなしれば。さぐさてすぐしさうま。
[ひしすちのこや]左座家のれうさ。[木つむくり]おやしうまれうりしう。これ
べきことのありすぐさぬ。さぐいのれこゝろりて。
いかでかこのれいそぎを。よそのことはさてすぐさ
むとおぼして。うさのごとなんしいで語けり。哀

なるれこうろざしなりし。おほまびのほそなぶひ
とうさねおちぐりとうや。なるりとうや。せうしの
人のかぞこうしけり。おもをのもう後一ぐ。むしされ
のしらきりしゆり。おしれぢのれこうちきと。よれ
衣ぐろまいれて。つしいとうなもしうてまれ
ぬへり。れふしまは。しらをぬべきかぎまも侍らねば。
つましかれど。かりなりもおもひこまへしのび
がたくなん。これはいとあやしかれど。人まも語りを
よと。おいしかなり。変れらんじつけて。いとあさ
ましう例のとおぼすまれかほおうぬ。おやしきさ
ふかぐまとそあれ。かくまれいしこしらな人も。

十四

ひさいりしづくいりこそよけれ。さすがにもちぢ
がましやとて。かへりことはつかまをしこなく
しるん。ちくみこのいとかるしうしる給けり也出まだ
人にかとさんはいと心ぐるしき人なりと男ら給。此こ
うちさのさもとに例のおなじすぢ此哥ありかり
秋方とそうしこうれ夕れかし衣恵がこもとに
なれずと思へば此てはむかしごとあるしを。
いとつりなうしづかに思ひふかう。つよりかうう
かきぬへり。おとゞまくきもれしおしさをぞ。え
ねんじ給はで。このうたよそつらん程こそ。まして
いまはちとしなくて。どころをかりつらんといと

あしがりのふいでは遅るはさはがしくとも我をん
とののひてあやしう人の心よりまじき此心だんこそ
さしでもありぬべきことなれと、よくさまうきのひて
ほ
うし衣まさうしころもうしころもうへきくも
うし衣なりとて、詞いとまめやかなりれひ本つひとれこそ
このむすぢなれば抱して侍りなりとてこをなり
のへば、忘いとまほひやかなりしひのて、詞あれいと
あし、ろうじこうやうまも侍りれと、をあし
がり給、池すしなしごといと御ほうりや、内のおとじは
さしもいそがれ給まじき此心なれど、めづらかな
事給し後はいけしかとれ心ようなしだ。

ざ面のことはかけ侍しれば、なるまのあやめとけりを。
給まじくなん。こころしらぬ人めをかぎりて、なをよれ
つ日のさほうまと罪しぬふ。けまさしまさしさを
やるべきこと侍しずなん。此かたしけまいりほどは。
かさりなきかしこまりとば。世まこめしなきことく
罪しさをながし。今までかく思びこめさせこまりひ
けり恨もいりぐそへ侍しざらんとなこて給
　こしめしやおさろ玉も紙かづくまで破がくれ
けりあまのこころよ。とてなる紙つくもあへず志ほ
これ給。ひめ君はいとしたづしき此省程どもれさし
つぐひづくましさま。たきそし給たほじ。

つどひづくましさま。そうそうし給ひねじ殿

ほ
よるべあまうかうなぎさまおよをてあまも
あぬ藻(し)くづとぞうし。いと(河)ほりなされうちつけ
ごとまなんとさえしまへど。いとこと(次河)りまなんと。
地
きえしやうかるなくて出まひぬみ(次ノ)ろうちつぎこく
人ぐ御子なくつどひまへり。れけさう(むまんとうけれ人ぐへ)ぐもあまる
ようじつまへれば。このあ(以)とぐまくいりおもしてほど
かうなさいかなることとりかせうるがひとまへつ。
みれ夜の君ぐち。中(柏)ね。弁(柏弁)の君がりぞほのきりまへり
けり。人きれぎさひしこと紙からうもうれしうも
むなりぬふ。弁はよくぞ打出ざりけりとさくめさて。
さ夜ことなりあ(添)とぐのれこ(好ミヘ)のこどもなめり。中宮の

れをしきなれば、つまようしひかなひ、まゝ時も有
なんと、ほくしていひねこまへり。中将（柏河）もおまれ
いたやさしこまり給なんや。めやすくとてこそ給
ぬれば、ほろ（左江）くとなきて、この君（河）ごろさへこれすげなう
しなふ。こゝ此前（こきでん）のれこころの衣まかりしませば
さふふなりとて、いとかやすくいそしく下らう
けしきべなどのつかうまつりこへぬ。ざうやくをも
こちぬ。しりやすくまどひありきつゝ。こゝろざしを
つくして。こやづへしありきて。内侍（左江河）のうこうりを
のれをしなしなへとをめきこゆれば、おさましう（こきでんん）。
いかなしひていつとなんとおぼしたり。まれも

いられ給ひず。おとゞ以のぞミなきゝめて。いとこれ
やうに打ひめて。女れ(こうきでん)のれうにまゐりたまへ事
つゞでに。いづし(詞)このあゆミの君。こゝろにまとめせず。
とと。いとけざやうにきこして。出きたり。いと以詞久
たうミけしひ。おほやけ人にて。げにいうにあひたゝん
内侍のうへのことハ。などゝをのれにとくしもれ
をぎりしと。いとまめやうにてのたまへば。いと(左近ハ)
うれしとゝて。さも(詞)此氣色給ひしまほしう侍し
りど。この女れ(こうきでん)ぞなど。をのづし以へきこしさを
給てんと。このミふくれてなんさふしひつゝを。おほ
さ人もれし給やうにきて給れば。爰にとゝろし

69038
6AP7B